

牛1頭の命の重さと向き合う分娩

分娩の重要性への気づき

(有)友夢牧場は、地域5軒の酪農家の想いが集まり結成され、2001年に稼働した。25年以上経営を続けるなかで、分娩の重要性に気づき始めたのは最近だったという。湯浅征寿専務(46歳)は稼働当初から経営に携わっているが、「分娩でここまで改善できると思っていなかった」と手応えを感じている。その改善のきっかけは「死産率」に目を向けたことだった。

同社では長年、年間の死産率が平均10%前後だった。しかし、経営方針の見直しや改善の結果、現在では4%台(2023年は1.8%)で推移している。

この数%の違いは酪農経営にとって非常に大きい。死産が年間約100頭から約20頭まで減少したことで、それまで繁殖や妊娠にかけた費用、個体販売、損失牛の補填、母牛へのダメージや次乳期への悪影響など、さまざまな損失を防ぐことができる。同社では年間約1000回分娩があるのだから、死産率改善による経営へのメリットは想像に難くない。

改善のきっかけは？

同社は設立以来、止まることなく規模拡大を続け、それに伴い抱えるスタッフの数も40名を超えるようになってきた。湯浅専務は酪農経営や牛の飼養管理に関する経験や知識は長年培ってきたものの、組織のマネジメントに関してはほぼ初めての経験で、スタッフ労務管理には限界を感じていた。そこで、明治飼料(株)のアドバイスのもと、2016年、牧場経営を再出発する気持ちで、経営理念や行動指針、目標とする出荷乳量などを掲げ直した。

その目標の中に「死産率を5%以内に抑える」を入れた。しかし、当時は分娩房がなく、乾乳牛舎(フリーストール)の通路で分娩を行ない、作業の合間に分娩対応をするような体制だったため、なかなか改善の兆しが見えなかった。繁殖検診で同社に関わっている石井三都夫獣医師(株)石井獣医サポートサービス)からも分娩房設置の助言を受けていたという。そこで同社は、「分娩房の設置」と「分娩の専任担当者の設置」を実施した。



▲もともとフリーストールだった場所を一部分娩房に作り替えた

清潔で快適に分娩できる環境を実現

同社の分娩房は乾乳後期ベンから一部を削り作り出し、分娩間近や破水が始まったタイミングで分娩房に移動して分娩できるようにしている。既存の牛舎で分娩房を作り出したため、スペースに限りがあることから、なるべく分娩房には1頭のみ入れ、牛にストレスがかからないようにしている。

分娩房設置に関して湯浅専務は、「以前は通路での分娩が当たり前だと思っていた。しかし、フリーストールで分娩することのリスクを石井先生から聞いたり、自身でもさまざまな情報収集をしたりして、分娩房の必要性を感じた」と振り返る。しかし同時に「分娩間際の牛をわざわざ移動するなんて、かえって分娩に良くないのでは……」と危惧していたとも。ところが実際に運用してみると、分娩がはるかにスムーズになり、何より子牛の病気感染リスクが大きく減ったことを実感したという。

分娩房を設けるからには、常に清潔な環境を実現しなければならない。敷料は粃殻をふんだんに使用し、分娩ごとに清掃する。

分娩改善プロジェクト

同社ではこれまで、分娩の対応は「作業の合間に手の空いている人がやる」という認識だった。そのため、どうしても「残っている仕事を片付けたいのに分娩で足止めを喰らっている」という感覚になり、人間都合の牽引などが“あるある”だった。しかし、それは結果



▲通路にはゴムマットを敷き、粃殻を敷いて段差を埋めている



▲すぐ隣が乾乳後期群となっており、移動の動線はスムーズで、牛にストレスがかかりづらい



▲松谷さんは分娩が近い牛を見つけたら色付きスプレーで印をつけ、すぐに見つけられるようにしている



分娩が近い牛の指標として、仙骨靱帯の▶
緩みや乳房の張りで確認



◀分娩時は子牛が汚れないように、シートを敷いて娩出させる



▲分娩房にはカメラを設置して監視している

◀リッキングはしっかり行なえるように促す



▲自然分娩に委ねるため牛の邪魔にならないように配慮する

として母牛を傷つけ、次の乳期や繁殖に悪影響を及ぼし、回り回って人の仕事を余計に増やすことにつながっていた。そのことにいち早く気づいたのは、治療課の松谷元晴さんだった。「本来は牽引しないほうが牛を傷つけないしリスクを下げられるのに、その場の優先順位で牽引してしまう状況が辛かった」と振り返る。現在は松谷さんを中心に「分娩改善プロジェクト」として、さらなる死産率低減に取り組んでいる。

分娩管理担当を設ける

同社では、1日の仕事の分担に「分娩担当者」がいる。分娩担当者は午前(午前2時～昼12時)と午後(昼12時～日没)の交代制で、常に誰かが乾乳後期群を観察し、分娩徴候を見逃さないようにした。分娩を迎える牛は分娩直前になったら分娩房に移動するが、担当者の最大の仕事は分娩徴候を見逃さないこと。目標は、乾乳牛群で分娩してしまう牛をゼロにすること。しかし、ここまで徹底して、かつ分娩徴候を見極めるポイントも押さええていても、突然分娩する牛が一定数いることから、「完璧に見極めるのは難しい」と湯浅専務は言う。

しかしこの担当制にしたことで、安全かつ清潔で快適な場所での分娩が可能になり、また不要な牽引をしなくなった。作業者の心にも余裕が生まれ、徐々に死産率は低下していった。担当者が均等となるように、特定の担当者ではなくシフトで全員に回るようにしている。そのおかげで全員からのフィードバックが得られ、牧場全体でノウハウが蓄積し、5年経った頃には死産率は目標だった5%を切り、2023年には1.8%までになった。

なお、昨年からは和牛の受精卵移植を取り入れ、胎子



▲リッキング後の子牛はお湯で洗うほうが早く乾いて良いという

の大きさなどに悩まされているが、4%台を維持している。同社は次の目標として、和牛分娩も対応しながら死産率2%以下を目指している(双子分娩も1頭ずつカウント)。

1頭に向き合えなければ意味がない

これらの取り組みを経て、社内の皆が分娩の重要性を再認識し、分娩が成功することでの作業的、経済的メリットも浸透してきた。また、20年以上経験してきた湯浅専務でさえも、「改めて分娩担当として分娩に向き合うと、絶対の正解がないことを思い知らされる。また、今さらながら、母牛の頑張りや子牛の誕生など、分娩に感動するようになった。どんな規模で何頭管理していようと、目の前の1頭を大切にしなければならぬと再認識した」と語る。

同牧場は、次の目標に向けて、より一層改善を進めていくとモチベーションが高い。▼

(取材＝前田真)

